

総評 2021年6月分 杉本真維子

今月の佳作からいくつか紹介します。

「鳩がなみだの池をつつく／水たまりに想う嘴の／ひずみ」(水越晴子)
かなしみの陰に隠れている傷が、「嘴」と「ひずみ」という言葉に掬い上げら、他者に見えるかたちになっています。そのことに静かに打たれます。

「夏休み母は仕事で／さみしくて／洋服の匂いを嗅いだりしていた」(加藤美紀)
幼年期の孤独と夏休みという一つのさみしさが重ねられ、存在そのものの孤独を浮かび上がらせています。

「はるか古代に続く／背景を描き込まれた私／約束通り／今を生きる」(降旗沃)
「私」は「今ここ」という歴史の切っ先に立ち、今日という日常を過ごしている。気の遠くなるような歴史を背後に持ちつつ、今という刹那を生きる。多重な存在である「私」が指摘されています。

「会話の合間を縫うように／波の音が流れる／何か話したような／そんな気である二人」(源楓香)
「波の音」は言葉なのだということが、まさに静かな波のようにさりげなく書かれています。

「象の足と鸚哥の爪／しなやかな海豚の動きから／太古の生き物を想像する夏」(茶和鈴)
たった一文字の「夏」があるのとないのとでは大違いですね。絵画にたとえるなら、「夏」が額縁の役割をして、風景をひきしめ、作品化へと導いているのだと思います。

「手持ち花火を／消える前に／わざと／水に入れた時の／あの音のトキメキ」(まぢりこ)
あのシュという音は「トキメキ」だったのですね。耳に残りつづけている音には意味があるということを知りました。

「遮光瓶の内まで響く蝉の声」(翠)
この瓶のなかに「蝉の声」を閉じ込めておくことができそうです。縦長に収まっている「声」のすがたに美を感じました。

「愛用のポストが忽然と姿を消した／実は／最初からなかったのかもしれない」(風船)
この作品のように自分にとっての当たり前を疑ってみるところから詩は始まるのでしょうか。

今月もよく磨かれた作品に出会うことができました。来月も楽しみにお待ちしています。